

広島安野の二日間の活動に参加して

高麗博物館 戸田 光子

私は東京の新宿にある「高麗（こうらい）博物館」でボランティアをしています。ここで2024年7月から2025年1月26日まで『強制連行』『強制労働』の否定に抗う～各地の追悼・継承の場をたずねて～という企画展示をしています。この展示パネルの中で安野発電所への強制連行を含め、2枚の中国人強制連行のパネル作成を担当しました。それで、10月20日の安野発電所の中国人強制連行の追悼集会と前日19日の広島市での集会に参加しました。

安野発電所のことはこの展示のための勉強を始めるまで、全く知りませんでした。高麗博物館は朝鮮と日本の歴史を学び、差別をなくすことをめざす、市民のつくる博物館ですので、展示内容もメインは朝鮮人強制連行です。しかし、加害企業と中国人被害者の間で和解が成立しているところがあることを示すために、花岡と鹿島、安野と西松、三菱マテリアルを取り上げることになり、安野発電所に出会ったわけです。

実際にこちらに来て、「継承する会」が和解に至るまで行った活動や和解成立後の活動を映像やお話で詳細に知ることができ、小さい発電所にまつわる、こんなに大きな市民の活動の歴史があることに改めて驚かされました。

19日の集会は于瑞雪さんの生涯を振り返るものでした。お二人の娘さんからもお父さんの話を伺いました。瑞雪さんは厳しくて話しかけられない人だった、広島にいたことを長い間話さなかった、1994年に劉宝辰さんたち調査団が訪ねてきた後で、于瑞雪さんに笑顔が見られるようになった、という話が印象に残っています。また、三項目要求書の話を知るとすぐに署名捺印して闘う意思を示した、とも伺いました。川原さんのお話で、45

年7月の傷害致死事件に「蜂起」という言葉を用いたのは于瑞雪さんだけだったということも、于瑞雪さんという人物像を想像するかぎになったと思います。

お話の前に、于瑞雪さんを最初に中国に訪問した時のビデオが流れ、市民の調査団の訪問がどんなものだったか、よくわかりました。また、集会の資料として、1994年の5月に市民団体が于さんから聞き取りをした記事を中心に、1月の河北大学の劉宝辰先生の調査や、広島の獄中被爆者の記事など当時の新聞記事を読むことができ、当時の興奮が伝わるようでした。

中国新聞社の特別論説委員、岩崎誠さんの講演では「戦後79年『獄中被爆』を問い直す」というタイトルで、どういう人たちがどこにいて被爆したかが詳しく解説されました。「強制連行」だけでなく、「被爆」という問題が大きく取り上げられ、認識を新たにしました。ここでも市民団体が被爆者手帳の交付に尽力したとのことでした。

夜は懇親会に出席。隣席になった女性は子どものころ土居に家があり、梨の木があったが、ある日庭先に中国人が3人やってきて、一人は梨を下さいと言ってもらったが、一人は何も言わずに梨を取ってしまった、自分が食べようと思っていた梨だったので悔しかった、という思い出を語られました。79年前の終戦後、帰国するまでの間のことだそうです。強制連行された中国人を実際に見ている方がおられることに驚き、またそのように中国人が出歩くことができたのかと意外でした。

20日の午前中はバスで広島市内から安野へバスで移動。バスの中でRCC中国放送の「和解」というドキュメンタリーのビデオを見ました。戦後、

戦犯問題に利用される恐れがあると関係書類を焼却したという話から、叔父が連行されたという遺族の尽力、裁判の経過、そして和解に至るまでを30分ほどにわかりやすくまとめていて、とてもよくできた番組だと思いました。もう一度ゆっくり見たいものです。

安野発電所のフィールドワークは、歩くコースが土砂崩れで通行止めのため、坪野貯水槽へは行けず、下から水圧鉄管を見上げての説明と発電所内部の見学となりました。中国電力の方が安野発電所の構造を説明され、水圧鉄管から落ちる水力でタービンを回すとのことでしたが、水を全く見ていないのでちょっと物足りなかったです。発電所や収容所跡はこのあたりの地形がほとんど変わっておらず、当時の写真と現在の様子を見比べて確認することができました。

午後は追悼式に参加。「安野 中国人受難之碑」は、大変大きく、高さ360センチ。これは強制連行された中国人の人数に因むものとのこと。裏の碑文には強制連行から碑の建立までの経緯が述べられ、中国人受難者及び遺族、西松建設株式会社と刻まれ、被害者と加害者がともに建立したことを示していて貴重です。その左右の石碑に180人ずつ360人全員の名前が刻まれています。于瑞雪の名を見つけた二人の娘さんは嬉しそうに刻まれ



た文字を撫でていました。

毎年参加される内田雅敏弁護士が追悼式前に中国人強制連行の各地の碑や和解についてお話をされました。和解は成立によって終わるのでなく、和解事業を行い、そこで学習することで和解の中身が深まると強調されました。ここではまさにそれが実現されていると感じました。

追悼式は遺族のほか安芸太田町長、中国駐大阪総領事館の方、広島県教組の方も挨拶され、きちんと認識されていることがわかりました。二胡の演奏の流れる中、全員が献花して式は終わりました。

その後、死亡した中国人の遺骨を預かっていた善福寺での追悼法要に参加。お焼香をして、善福寺のご住職のお話も聞き、ほっとした雰囲気になって、この日の日程が終了しました。

ここ安野の継承する会の活動は、市民が遠く中国まで出かけて行って被害者を訪ね、中国の大学と協力して証言を集め、企業責任を問い、裁判を支援し、和解につなげるという、大事業を果たしました。そして、今も継承活動を続けています。これはもっともっと知られるべきだと思いました。

ところで、今年1月末、群馬県は県立公園から「朝鮮人犠牲者追悼碑」を撤去しました。日本政府は朝鮮人の「強制連行」「強制労働」はなかったと言い、歴史の事実を否定しています。しかし、安野の「継承する会」のように、こうした活動をする人たちは各地にいます。高麗博物館の役割はそれら各地を紹介し、多くの方に展示を見て知っていただくことだと思っています。まずは高麗博物館へお出かけください。

安野発電所で朝鮮人が働かされていたことはこれからの研究にしていきたいと思います。

最後になりましたが、安野の展示作成では、内田雅敏先生、川原洋子さんに貴重な助言をいただきました。ありがとうございました。